

言語に顕現するゲシュタルトとしての自己非自己システム

川 岸 克 己

The System of “Jiko-Hijiko” for the Gestalt in Japanese Language

Katsumi KAWAGISHI

1. は じ め に

1.1. 目的と背景

本論は、これまで著者が研究を続けてきた自己非自己構造の研究を、現在の学問状況のなかでどのように位置付けることができるかについて論じ、そのうえで、自己非自己システム（構造）についての研究の現状と今後の可能性について探ることを目的とする。

自己非自己の研究の端緒は、日本語の助詞や助動詞において、同じ文法カテゴリのなかに2つの形態（単語）が存在するのはなぜか、ということであった。この研究の最も古くは、係助詞のヤとカとを比較した論文「係助詞ヤ・カにおける対他性について」(1993)で、ヤとカの間にある「対他性」の有無を検証するものであった。そののち、同様に同一文法カテゴリで2つの形態をもつ、いくつかの助詞や助動詞を分析し、「語選択軸の策定－助詞・助動詞の対立構造－」(1995)を発表した。そこでは、同一文法カテゴリの中には、「自己」と「非自己」とを区別するような規則が存在するという結論として主張した。その後も、指示語や敬語語彙などにおいても同様の現象を認め、それらも自己非自己理論の研究対象としている。

しかし、文法カテゴリの深層に、従来の文法では捉え得なかった何かが存在することを指摘するこの研究は、従来の研究のいずれにも明確なカテゴリで分類することができなかった。日本語学のさまざまな研究の中には、著者の研究と同様の結果を得ていると思われるものがすでにいくつか存在していたが、その研究の知見の正否とは別に、その研究にどのような価値があるのかを正しく評価することはできていないのが現状であった。あるいは、それらの研究が研究史のなかでどのような流れのなかで位置付けるべきものなのかを明確にし得なかったがゆえに、それぞれの研究が単発的なものになってしまっていた。

理論の成立のためには、その理論が何を明らかにするものであるのかの明確でなければならない。しかも、その明らかにするところのものを、どのような前提とどのような手法で明らかにするものであるのかもあわせて明確でなければならない。そして、そこから得られた知見が研究者の間で共有され、そして、さらなる新しい知見のために、体系化されることが重要である。

1.2. 手 法

言語の研究、あるいは日本語の研究をめぐるさまざまな状況が変化し、著者の自己非自己理論などをどのような研究の流れのなかに位置付けるべきか。著者の研究は、すでにいくつかの論文

のなかでも述べているように、言語の枠組みを超えて、ヒトとしての枠組み、さらには生命としての枠組みのなかで、言語に表出される構造を捉えるべきではないかと主張してきた。

こういった主張を繰り返すなかで、いわゆる従来の文法のカテゴリよりも深層に顕現した何ものかを追究する学問としては、認知言語学が近い存在であることがわかってきた。

認知言語学は、1900年代の後半にアメリカ合衆国の研究者によって提唱された。認知言語学とは、環境世界の中で様々な相互作用や内的経験を持ちながら、そこに生きる認知主体の認知的営み、という包括的な枠組みから、言語に焦点を絞り、意味と形式や認知と言語の静的・動的な様相の説明を試みる言語研究の総称である（辻幸夫『認知言語学キーワード事典』p182）。認知言語学は、1970年代にアメリカ合衆国の研究者を中心として誕生した学問である。日本には、1980年代になって広く日本語研究者に新しい学問分野として認識されるようになった。

さらに、「認知言語学は、様々な研究領域で得られた知見を混在させているのではなく、独自の理論的研究に融合させ、諸研究を有機的に結びつける役割を担っている」（『認知言語学キーワード事典』p184）というように、認知言語学は従来の枠組みのなかでの研究ではない。それゆえ、新しい発見、考え方を吸収する力を秘めている。

本論は、この認知言語学という大きな学問の流れのなかに、自己非自己理論を位置付けることによって、自己非自己理論の現状と可能性について論じていく。具体的には、認知言語学で用いられる概念装置として重要な概念を自己非自己理論研究に照合させ、この研究に適応させることができるかどうかを判断していく。

2. 自己非自己の論考

2.1. 川岸論文の論考

言語現象のなかで、特に機能語とよばれる助詞や助動詞をみると、同一文法カテゴリに2つの形態をもつ場合が少なくない。古典語に多く見られるが、現代語でも同様に見られる現象である。たとえば、もし、過去という概念を表現するのであれば、それを意味する形態は1つでよいはずである。2つの形態をもつということは、そこに分節しなければならない何らかの概念が存在すると考えるのが妥当である。全く同じものを表すのに、異なる形態が併存することはない。この前提のもと、2つの形態で一對をなすものを分析していくと、そこにそれぞれの文法カテゴリとは別に、「自己」と「非自己」とを分節する基準が存在することが判明したのである。

たとえば、過去の助動詞キとケリとを例に挙げるならば、キは、「直接体験過去」あるいは「回想過去」などと呼ばれ、自分自身が経験したことを過去のものとして表現する際に用いられる形態である。もう一方のケリは、「伝聞過去」などと呼ばれ、自分自身が経験したものではない、他人から聞いたことを過去のものとして表現する際に用いられる形態である。すなわち、同じ過去であるにもかかわらず、その過去が「自分で経験したもの」なのか、「自分で経験していないもの」なのかが、同一文法カテゴリに、2つの形態を存在させる理由だということが分かる。言い換えるならば、「自己体験過去」か「非自己体験過去」かという分節が存在するということがある。

同様の現象は、助詞や助動詞以外の形態にも見られる。例えば、日本語の指示語は、コレ・コノ・ココなどのコ系と、ソレ・ソノ・ソコなどのソ系、アレ・アノ・アソコなどのア系との3項対立となっている。しかし、実際には、カレ・カノ・カシコなどのカ系を加えた、4項対立構造

であることが分かった。図示すると以下のようになる。

〈表1〉

		心理的領域	
		自己領域	非自己領域
物理的領域	自己領域	コ系	ソ系
	非自己領域	カ系	ア系

ここに存在する分節基準は、「自己領域」なのか「非自己領域」なのかという分節である。

以上からわかることは、それぞれの文法カテゴリにおいて、それぞれの文法カテゴリに適合する形で、自己非自己の構造がその深層に存在するのだということである。

以上紹介したもの以外で、現在のところ自己非自己構造が確認された文法カテゴリは、以下の通りである。

- ① レル（ら抜き言葉）／ラレル（受身と可能を表す現代語の助動詞）
- ② レ＋可能動詞（れ足す言葉）／可能動詞（可能を表す現代語の助動詞）
- ③ マイ／ナイ（打消を表す現代語の助動詞）
- ④ タ（過去をあらわす現代語の助動詞）／ル（動詞の原形）
- ⑤ ダ／ダロウ／ラシイ／連用形＋ソウダ／終止形＋ソウダ（推量を表す現代語の助動詞群）
- ⑥ ハ／ガ（主題・主格を表す現代語の助動詞群）
- ⑦ ス・サス／ル・ラル（受身・尊敬・可能・自発を表す古典語の助動詞群）
- ⑧ ジ／ズ（打消を表す古典語の助動詞群）
- ⑨ ツ／ヌ，タリ／リ（完了を表す古典語の助動詞群）
- ⑩ キ／ケリ（過去を表す古典語の助動詞群）
- ⑪ メリ／ナリ（推量判断を表す古典語の助動詞群）
- ⑫ ガ／ノ（主格を表す古典語の助動詞群）
- ⑬ ハ／モ，コソ／シ，ナム／ゾ，ヤ／カ（提題・提示・疑問などを表す古典語の助動詞群）
- ⑭ 尊敬語／謙譲語／丁寧語（現代語と古典語の敬語群）
- ⑮ 他動詞／自動詞（現代語と古典語の動詞の活用語尾）
- ⑯ コ系／ソ系／ア系／カ系（現代語と古典語の指示詞群）

研究が進むにしたがって、さらに多くの自己非自己構造をもつ形態を見出すことができるだろう。

個別の文法カテゴリの研究は、次第にそれぞれの文法カテゴリの間に、共通する何かの存在を明らかにしていった。この研究のプロセスは、帰納（induction）的にそれぞれの文法カテゴリを分析していったら析出されたというものではない。むしろ、演繹（deduction）的なそれによって得られたものでもない。いわば、仮説推論（abduction）的に得られるものであった。それぞれの文法カテゴリの深層に共通する何かが存在するということと、それが文法カテゴリとは無縁そうな「自己」という存在を提示するシステムであるという文脈の存在が、単に言語の枠組みを

超えた何かを意識させるには十分であった。

文法カテゴリの深層にある「自己」をキーワードとしたシステムが言語の語彙に「自己」を表出させるためには、同時に「自己でない」ものの存在を明確に表示することが必要である。自己でないもの、すなわち、「非自己」である。この「自己」と「非自己」とを対置させることによって、言語の文法カテゴリの深層にあるシステムは、「自己」の存在を明示させようとしているのだと結論するに至った。

そこで、この「自己」と「非自己」とを分節するシステムを、静的に「自己非自己構造」と定義し、さらに、動的に「自己非自己システム」と定義した。

そして、これら、文法カテゴリの深層に存在する構造とシステムに関する理論構築の営みを「自己非自己理論」と名付けた。

2.2. 同様の視点からの論考

言語というシステムを超えた視点からではなくても、自己非自己に通じる構造をすでに見出している研究がある。

まずは、大野晋氏による係助詞（ハ・モ・コソ・ナム・ゾ・ヤ・カ）の研究との成果である。大野晋氏の『係り結びの研究』（1993）では、7つの係助詞は、2種類に分けられるとしている。ひとつは、情報を「既知」のものとして提示する機能をもつもので、ハ・コソ・ナム・ヤがこれに属し、もう一方は、情報を「未知」のものとして提示する機能をもつもので、モ・ゾ・カがこれに属する、としている。また、現代語のハとガにおいても、同様に情報を既知と扱うのか未知と扱うのかで、大きく分けられるのだとしている。既知とはすなわち、自分自身が既に知っている、自分の領域の情報であることを意味する。いわば、言語は、ある語彙によって表現される事柄が、言語主体にとって、既知の情報か未知の情報かという意味づけを常に行っているということである。

大野晋氏は、なぜ日本語の係助詞が上記のような二系統に分かれるのかという問いには明確には答えていないが、これが日本語の本質に深くかかわるものであると捉えていたことは、多くの著書の中からはうかがい知ることができる。

次に、自己非自己に通じる構造を日本語に見出した研究として、渡辺実氏の「わがごと・ひとごと」論をあげることができる。渡辺実氏は「わがごと・ひとごと」の観点と文法論（1991）のなかで、「日本語では、話手自身のこと（「わがごと」と呼ぶ）と把握するか、話手に関わりなく成立すること（「ひとごと」と呼ぶ）と把握するか、を表現する水準があるように思われる。」（p1）と述べている。その現象は、大野晋氏のそれよりも広範にわたり、副詞、助動詞、形容（動）詞、人称代名詞、終助詞、さらには、やる・もらう、のど構文、なども「わがごと・ひとごと」の水準で把握されているのだとしている。

では、なぜ日本語のなかに「わがごと・ひとごと」の把握の仕方が存在するのかということについては、「それが構文論・意味論に広く深くからみそうだ」（p14）と上掲論文の末尾で述べてはいるが、いわゆる文法論の領域を超えた何かであることを示唆するにとどまっている。ここでいう文法論とは、統語論のことであると想像するが、意味論の範囲におよぶという指摘は、この「わがごと・ひとごと」の分節が単なる文法カテゴリの延長にあるものではないということを感じ取ってのことであろうと思われる。

さらに、重要な論考として、神尾昭雄氏の「情報のなわ張り理論」をあげることができる。神

尾昭雄氏は、『情報のなわ張り理論』（1990）のなかで、「話し手や聞き手にとって、文の表す情報との間には一次元の心理的距離が構築され、その距離は〈近〉および〈遠〉の2つの目盛りによって測定される」（p21）としている。この理論による〈情報のなわ張り〉は、その文の情報を、話し手と聞き手との間で、自分の領域の情報なのか自分の領域の情報ではないのかが、きわめて重要な意味を持つものと説明されている。

具体的には、情報のなわ張り理論は、文末が「確定的な断言の形をとる文形」を〈直接形〉とし、断言を避けた不確定な文形を〈間接形〉とした。それに文末の終助詞「ね」を接続させるか否かで次の表のような関係が、話し手と聞き手との間に成立するとしている（p32）。

〈表2〉

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

特筆すべきは、神尾氏の掲げる〈なわ張り〉という概念について、これは「行動生物学的ななわ張りの概念に根ざすものであり、したがって生物学的な基盤を持つものである」（p5）と述べているところにある。

また、神尾氏は、情報のなわ張り理論という語用論的な研究について、上掲の『情報のなわ張り理論』のなかで、以下のようにも記している。

語用論は、一般に現実の状況下における言語の使用に関する研究領域とされているが、筆者の語用論についての関心は、基本的には一般的認知能力がどの様に言語または言語使用に反映しているか、あるいは言語または言語使用がどの様に一般的認知能力によって司られているか、という点に関する興味に発している。したがって、本書は、情報のなわ張りの理論という一理論の研究を通して、一般的認知能力と言語ないしは言語使用との関わりを探ろうとした試みである。（「まえがき」）

このように「一般認知能力」と言語との関わりを探ると明言した研究は、自己非自己理論の研究において、たいへん重要である。しかも、その理論の核心が、言語主体（話し手あるいは聞き手）にとって、〈近〉か〈遠〉か、という概念で表される点は、それが文レベルのものであるのか単語レベルのものであるのかという違いを別にしても、自己非自己の研究にとっては、研究の方向性を同じくする重要なアプローチと言っていいだろう。

3. 自己非自己におけるゲシュタルト性

3.1. 自己非自己と認知言語学

このように、言語における自己非自己といった視点の構造を見出すとき、先に挙げた3氏のように、言語の枠組みにとどまらない何かを感じるといったところは共通している。しかも、神尾

氏が指摘するように、ここに見出されるものは、「一般認知能力」と深く関わっているのだということも理解できることだろう。

しかし、これらの研究は、従来の枠組みでは捉え得ない何か、というところまでは指摘できたものの、これが学問の流れとして成立するには、これらの研究を言語研究の中に自ら組み入れていかなければならない。

本論が主張したいのは、この点である。たとえ、いくら自らの研究の成果が独自性を持っているものであったとしても、その研究を研究という営為のなかで適切に位置づけなければ新しい知見として共有することはできない。共有することができなければ、社会的行為として研究は成立しないと考えるからである。ゆえに、認知言語学と自己非自己の接点を具体的に探らなければならない。

3.2. 「ゲシュタルト」

認知言語学の研究に用いられる概念に、「ゲシュタルト」というものがある。「ゲシュタルトとは、もともとは心理学の用語であり、視野にある対象を1つのまとまりのあるものとして知覚する心的作用によって形成されるまとまり（構造体）」をいう（『認知言語学キーワード事典』p66）とされている。たとえば、自然物の中に小さな丸がふたつ然るべき距離で水平方向に並んでいたら、私たちはこれに「目」と認識する。さらに、その丸の中間の下方向にもうひとつ丸があれば、それを今度は「口」と認識する。そして、その三つの丸は「人の顔」という、丸以上の意味を発生させる。むろん、そこに「顔」を視認したのは、そこに「顔」があるからではなく、「顔」というものを見てしまったヒトの側にある。すなわち、ヒトは、それぞれの部分以上の何かを事象に見いだしてしまうということである。このことから、「ゲシュタルト」は、「全体は、部分の総和以上のものになる」としばしば表現される。

山梨正明氏は、ゲシュタルトを用いた方法について、「日常言語の記号系は、離散的で抽象的なシンボルの自律的な系として捉えるのではなく、言語主体による外部世界の解釈を反映するゲシュタルト的な経験のパターンから、カテゴリー化のプロセスを介して抽象的なシンボルの記号系へと発現していく結果として捉えていく」（山梨正明『認知構文論』p6）としている。

しかも、その際には、ゲシュタルトの要因として「経験の要因」があり、過去に経験したり親しんだりするものに対して、ヒトはまとまって知覚しやすいという傾向があることがわかっている。すなわち、我々の認知は、現実の事象に何らかのバイアスをかけて、そこに意味を付加してから認識するという傾向にある。そのうちの1つが「経験の要因」であるというわけである。

言い換えれば、ある事象が認知されるとき、経験したものであるかどうかあるいは親しみのあるものであるのかを1つのまとまりとし、そうでないもの、すなわち、経験したことのないものあるいは親しみのないもの、とを区別することによって、我々は情報として事象を認知していることができる。

翻って、自己非自己構造は、ある事象が自分の領域のものなのか、そうではないのかを区別する。自分の領域とは、すなわち、その事象を過去に経験したことがあるのでよく知っている、あるいは、十分に理解している事象をさす。一方、非自己領域とは、逆に、過去に経験したことのない事象であったり、十分に理解できていない事象だったりということである。したがって、自己非自己理論は、ゲシュタルト的な認識のパターンの1つなのだということがいえる。

しかしながら、このゲシュタルトは、他のゲシュタルトのなかの1つとするには、あまりにも

概念的に大きすぎる存在である。日本語の助詞や助動詞の多くの形態に、その存在が確認できるということは、このゲシュタルトが単なるゲシュタルトではないということを示唆するものでもあるだろう。これに関する言説として、山梨正明氏『認知構文論』で、以下のように述べられている。

認知言語学のパラダイムは、いわゆる言語能力にかかわる知識は、ゲシュタルト知覚、視点の投影、イメージ形成、カテゴリー化などの基盤となる人間の一般的な認知能力の反映として規定されるという視点に立っている。換言するならば、認知言語学のパラダイムでは、いわゆる言語能力にかかわる知識は、自律的なモジュールとしての言語知識ではなく、一般的な認知能力によって動機づけられ、この能力の反映（ないしは発現の結果）として規定される。（p3）（下線川岸）

言語であるがゆえに、あるいは日本語であるがゆえに、文法カテゴリの深層において自己と非自己とを区別しつつものごとは認知されていくのだという考えは誤りであり、我々が自己と非自己とを区別するのは、言語という独立した体系に起因するのではなく、我々自身の存在、すなわち言語をひとつの機能として包含するヒトとしての認知能力に起因するシステムなのだというところである。

3.3. 「スキーマ」

ゲシュタルトは、自分の領域の事象を認識することによって、認知能力を発揮させようというシステムであると理解することができるが、その実現には、自分の領域以外との対比によって初めて可能となる。したがって、自己の領域を認知するゲシュタルトは、自己の領域か、自己の領域ではないかという差異を分節の基準としなければならない。これがひとつのかたちとなったものが、各文法カテゴリにおける自己非自己の分節構造である。

各文法カテゴリにおいて、この自己非自己構造は、具体的にはさまざまな分節基準へと変化する。たとえば、先にも挙げた過去の助動詞キ・ケリであれば、直接「体験」した過去なのか否か、という「体験」が分節基準となるが、完了の助動詞ツ・ヌであれば、出来事が「人為作為的」か、あるいは「自然推移的」か、というように、「人為」の有無が分節基準となる。しかし、それぞれの文法カテゴリでの自己非自己の分節基準だけを見ていては、離散的な現象としか捉え得ない。

認知言語学は、一般認知能力の研究において、「スキーマ」という研究方法の概念を導入する。「スキーマ」とは、「同じ事物を指す他の表示よりも概略的で詳細を省いた記述がされている意味、音韻、もしくは象徴構造」（辻幸夫『認知言語学キーワード事典』p124）とされており、「プロトタイプ」と「拡張事例」から構成される。プロトタイプはもっとも典型的な用例をさし、拡張事例はその他の具体的な事例をさす。この両者から抽出された「直接体験過去／間接体験過去」という構造がスキーマである。また、隣接する完了の助動詞ツ・ヌにも同様にプロトタイプと拡張事例が存在する。そして、その過去の助動詞キ・ケリと完了の助動詞ツ・ヌとに共通するものを「スーパースキーマ」とよぶ。もっとも上位のものをスーパースキーマと呼ぶ場合もある。このスーパースキーマという考え方で重要なのは、スキーマは階層的であり、相似的な枠組みが幾層にも重なっているという考え方である。そして、そのもっとも上位にすべてのスキーマを包含する抽象的なスキーマとしてスーパースキーマが存在するということである。

これはまさに、自己非自己構造が、各文法カテゴリにおいて、さまざまな具体的な分節構造を構築していること、そしてそれが実はヒトの認知に関わる根源的な分節のロジック自己か自己で

ないかによって生成されているのだということと全く別のことではない。

4. 認知言語学のパラダイムとアプローチ

4.1. パラダイムとアプローチ

自己非自己の構造が認知言語学的なアプローチと親和性が高いことは、ゲシュタルトあるいはスキーマの概念との関係から読みとれる。これらだけではなく、認知言語学のパラダイムとアプローチは、自己非自己理論といかに親和的であるかを他の概念からも知ることができる。

まずは、認知言語学という学問分野のパラダイムとアプローチについて見てみよう。山梨正明氏は、「認知言語学は、〈主体性〉を基盤とする言語学のアプローチである」と述べている（『認知構文論』p5）。ここで初めて〈主体性〉という概念が登場したが、この概念は、認知言語学にとって、すでに重要な概念となっている。これまでの文法論、たとえば、構造言語学や生成文法は、言語の自立性を前提としており、言語外の要因を文法の分析に持ち込むことを容認しなかった。しかし、認知言語学は、全く逆のアプローチを採用する。

認知言語学のアプローチでは、分析の対象としての言語表現は、文法のどのレベルの言語形式であれ、言葉の背後に存在する主体の認知プロセスのダイナミックな発現の結果（ないしは概念化の結果）として規定される。換言するならば、言語表現は、ミクロレベルからマクロレベルのどのレベルの言語単位であれ、外部世界に対する主体の概念化の結果として規定される。（山梨正明『認知構文論』, p5）

この認知言語学の考え方は、生成文法的前提とは真っ向から対立する。今まで生成文法が捨象してきたものこそが、認知言語学のパラダイムであり、それこそが言語の本質を捉えうる方法なのだということである。「言葉の背後に存在する主体の認知プロセスのダイナミックな発現」というのは、まさに文法カテゴリに2形式の併存およびその対立という形で顕現する「自己非自己システム（構造）」に他ならないのである。

4.2. アフォーダンスと分散認知

自分と自分でないものを分ける、もう少し厳密に言えば、言語によって表出しようとしている情報が、自分の領域内の情報なのか、自分の領域外の情報なのか、について、さらに考察を深めたとき、以下のような問いが生まれる。なぜ、「自己」と「非自己」とを区別しなければならないのか、あるいは、なぜ自分の領域か否かなのか。そしてさらに、なぜ文法のあらゆるレベルでそれらが言語をコントロールする概念になっているのか。それは、言語内部ではなく、言語の外部に、その理由と根拠が存在する。さきの山梨正明氏の言葉によれば、言語の表現は、「外部世界に対する主体の概念化の結果」（上掲p5）である。この外部世界があるからこそ、われわれの言語は、それを主体的に認知することができるのである。

この外部世界の存在が言語に影響を与える、あるいは、主体の外部世界認知に影響を与えるのだという発想は、「アフォーダンス」という概念によって規定される。アフォーダンスとは、アメリカの知覚心理学者ジェイムス・ギブソンの提唱した概念で、ある事物あるいは事象に対する情報は、事物あるいは事象それ自体の属性ではなく、環境と人間との関係によって構築されていく、というものである。すなわち、外界に存在する対象物を認知するとき、われわれは、対象物とわれわれの身体を基準に捉えているということである。たとえば、河原で小石を投げようとす

るとき、足下にあるたくさんの形や大きさの小石の中から、私たちが選択するのは「投げる」という行為と私たちの身体性に基づいた属性のものである。すなわち、我々が「行為する」、さらに大きく言えば我々が「生きる」という行為の場において、情報は我々の身体性との関係を取り入れたものとなるのである。

さらに、「分散認知」という考え方がある。これは、我々が何ものかを認知する場合、純粋に我々のゲシュタルトによると考えるのではなく、「認知に関わる情報は頭の中の知識や記憶のほか、環境や人工物の中にも分散して存在している」（『認知言語学キーワード事典』p229）という考え方のことをさす。認知のシステムは、言語機能のみにあるのではなく、言語機能の外側にもあるのだということをこの概念は意味している。自己非自己という分節も、もともとと言語のなかに起因するものではなく、ヒトがもつ身体性あるいは生命性が、認知システム、ひいては、言語表現に影響を与えているといえるのである。

4.3. 身体性と動作主性

ここまで、言語の体系が自立する言語システムの内部で構築されるのではなく、言語外の認知システムや外部環境とのやり取りの中で構築されていくことを見てきたわけだが、自己と非自己を分節する構造に見て取れるのは、その認知システムが動作する知覚をもつ「主体」の存在である。さらにいえば、その主体の「身体性」が言語の構築に重要な役割を担っていることである。認知言語学は、主体に焦点をあてた言語システムの構築を、最大の目標とする学問であるといえる。

5. 自己非自己における生命のロジック

5.1. 生命のロジック

言語の構築に認知機能が大きな役割を果たしているということにおいて、知覚や身体性ばかりを重要視するのは誤りである。つまり、見る、聞く、触る、匂う、味わうといった感覚器官、いわゆる五感による認知のみが言語の構築に関わっているわけではないということである。感覚器官（五感）はいわばセンサーであって、そのセンサーから入力されたものを処理する器官が重要である。厳密に言えば、この情報の処理器官がどのような情報を欲しているかが自己非自己構造の存在の根拠になる。

自己か非自己かという情報は、どこで感知しているのか。あるいは、どこがその情報を欲しているのか。

自己か非自己かという分節を欲しているのは、認知の根本である脳を含む「身体」である。その身体とはまさに「生命」と別のことではない。この生命が、自己か非自己かという情報を欲している。生命の定義は一通りではないが、外界と隔てられていること、代謝を行うこと、自己複製を行うこと、この3つが条件であるとされている。この3つの条件のうち最も原初的とさえ思える「外界と隔てられていること」というのは、まさに自己と非自己とを区別するというところに他ならない。詳細にみていけば、代謝も自己複製も、自己と非自己、という枠組みのなかでの活動であると考えることができる。

とすれば、自己か非自己かという分節は、しかもそれが、多くの文法カテゴリに顕現することを考えると、きわめて原初的な、しかしもっとも重要な分節概念であることが分かる。

カントが、人間の認識は「感性」と「悟性」とによって構築されると説いたが、その感性（時

間や空間認知)も悟性(因果律などの論理)も超えたところにあるロジックが自己と非自己との分節なのである。

5.2. 認知言語学へのフィードバック

認知言語学は、認知の根本であるところの〈身体性〉を最重要概念と捉え、学問体系を構築しつつある。しかし、その認知のシステムの存在を支えるロジックが存在することにも注目する必要があるだろう。なぜ言語が存在するのかといった哲学的な問いを、哲学ではなく、言語学さらには科学によって解明することが求められている。認知言語学が科学としてそういった言語存在のいわば哲学的な問いにも答えて行くには、「生命のロジック」を見据えた、帰納でも演繹でもない、いわば仮説推論によって、遂行されなければならない。

6. ま と め

言語に顕現する構造の解明を続けていくと、言語の枠組みをはるかに超え、言語を機能させる主体であるヒトの存在について考察することと別ではないものにしていった。そうなればそうなるほど、戸惑いもまた強くなった。そのようなときに現れた認知言語学は、自己非自己理論にとっては、この上なく重要な存在であった。

しかし、自己非自己理論を認知言語学が唱える認知システムに起因する言語理論のひとつという視点からみると、大きな違和感はない。認知言語学が追い求めるところと、自己非自己理論がもとめようとすることは、同じである。認知言語学の展開にともなって、新しい概念や方法が生み出され、自己非自己理論も大いに刺激をうけることだろう。

しかし、その一方で、自己非自己理論が見据えるものは、単なる知覚や思考のバイアスだけではない。言語を機能させる生体がもつロジックというものの存在が、言語に顕現する、あるいは言語に影響を与えているのだということを主張するには、現在の認知言語学の手法のさらなる発展が期待される。

自己非自己理論の進化は、認知言語学が探究する主体の言語への関わりについて、さらに進化させた「生命のロジック」という視点から論じることのできるものへと発展させていくことのできる理論となりうるだろう。

参 考 文 献

- ・山梨正明『認知構文論 文法のゲシュタルト性』大修館書店、2009年3月
- ・辻幸夫(編)『認知言語学キーワード事典』研究社、2002年11月
- ・大野晋『係り結びの研究』岩波書店、1993年1月
- ・渡辺実「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」『国語学』165集、日本語学会、1991年6月
- ・神尾昭雄『情報のなわ張りの理論 言語の機能的分析』大修館書店、1990年5月
- ・山口明穂『国語の論理』東京大学出版会、1989年3月
- ・牧野成一『ウチとソトの言語文化学 文法を文化で切る』アルク、1996年12月
- ・川岸克己「係助詞や・カにおける対他性について」『学習院大学国語国文学会誌』第36号／学習院大学、1993(平成5)年03月15日
- ・川岸克己「語選択軸の策定－助詞・助動詞の対立構造－」『作新国文』7／作新学院女子短期大学、1995(平成7)年12月20日

- ・川岸克己「なぜ、助動詞は『対』をなすのか?」『作新国文』8／作新学院女子短期大学, 1996（平成8）年12月20日
- ・川岸克己「助動詞タリ／リ対立構造」『学習院大学上代文学研究』第21号／学習院大学, 1996（平成8）年03月31日
- ・川岸克己「〈非主体的〉推量判断としてのメリ推量」『作新国文』9／作新学院女子短期大学, 1998（平成10）年01月20日
- ・川岸克己「〈自己／非自己〉構造としての敬語体系」『作新国文』10／作新学院女子短期大学, 1998（平成10）年12月10日
- ・川岸克己「現代日本語の判断体系における〈主体〉と〈視覚〉」『学習院大学上代文学研究』第23号／学習院大学, 1998（平成10）年03月31日
- ・川岸克己「〈自己領域〉分節構造としての指示詞体系」『学習院大学上代文学研究』第24号／学習院大学, 1999（平成11）年03月31日
- ・川岸克己「想起と発現－時制を表すタ形式の本質－」『安田女子大学紀要』第35号／安田女子大学, 2007（平成19）年02月28日
- ・川岸克己「二重可能表現形式にみる意味分節基準－「れ足す言葉」が分節するもの－」『国語国文論集』第38号／安田女子大学, 2008（平成20年）01月31日
- ・川岸克己「発現の助動詞「た」における情報の認知構造－情報のなわ張り理論との検討から－」『国語国文論集』第39号／安田女子大学, 2009（平成21年）01月31日
- ・川岸克己「敬語体系における相似的階層構造」『安田女子大学紀要』第37号／安田女子大学, 2009（平成21）年02月28日

[2009. 9. 28 受理]